



太陽はいつどうやってできたの

宇宙にただようガス星雲が基になった

約50億年前の宇宙には、ガス星雲（ガスやちりの雲）がただよっていました。このガス星雲は、たがいに万有引力（重さがあるすべての物質は、たがいに引きあう）で引きあって、大きな雲のかたまりになりました。それが、万有引力によって、さらに中心に向かって縮んでいきました。

このようにガス星雲が縮んでいくうちに、星雲の真ん中にガスのこい大きなかたまりができました。これが、大昔の太陽の姿なのです。

核融合反応による光と熱

できたばかりの太陽は、おもに水素が集まってできていましたが、まだ、かがやいていませんでした。太陽がかがやき始めるようになったのは、水素がヘリウムに変わる、核融合反応という反応（二つ以上の物質がいっしょになって変化が起こること）が起こってからです。

核融合反応によって太陽は、強い光と高い熱を出して燃え始めるようになりました。この核融合反応が起こったのが、今から約50億年前のことで、太陽は、このときに生まれたのです。（監修・国司 真）

